

遠藤周作『死海のほとり』論

—〈巡礼〉にみる宗教・国家・ジェンダー—

余 盼 盼

はじめに

遠藤周作『死海のほとり』は、一九七三年六月に新潮社より刊行された書き下ろし長篇である。本作において、奇数章にあたる〈巡礼〉と偶数章の〈群像の一人〉が交互に配置され、物語は進行していく。

〈巡礼〉の章では、イスラエルを訪れた主人公の中年作家・「私」が、当地に在住する聖書学者の友人・戸田に案内されて、「あの男」・イエスの足跡を追う旅物語が主軸となっている。それと同時に進行的に、旅中に蘇ってくる「私」の記憶が語られており、イスラエルに来るまでの心的遍歴が辿られていく。

なかでも多くの紙幅で綴られているのは、「私」が教会を離れる原因となったと思われるような一連の出来事(後述)である。先行研究では、これらの出来事は総じて、「私」という人間の「弱さ」や「卑劣」な姿を示す典型的な事例としてまとめられることが多い。^①一方で「私」の犯した「罪」を「日常感覚の次元で、容易に許せる程度のものでしかない」^②と評し、そのような「私」に、イエスの「慰め」を希求せずにはいられぬ現実の苦痛があるのかと問う論者もいる。^③しかしこれまでの評価では、「私」を苦しめつづけてきた、トラウマともい

うべき心の「痛み」について十分な解釈がなされているとはいえない。また、作品内部においても、「私」を強く呪縛する「原型」の意味合いや、戸田という重要な人物との関係についても、分析の余地が残されている。

以上のことを踏まえて本稿では、〈巡礼〉の章に展開される「私」の回想を中心に、イスラエルに行くまでの「私」の内面の苦痛を、宗教・国家・ジェンダーという総合的な観点から浮き彫りにしたい。まず一章から二章にかけて「私」の「原型」の意味とその形成過程を追いつながら、戦時下のキリスト教信者として「私」が受けてきた宗教と国家による二重抑圧を説明する。続く第三章では、宗教と国家の対立という表象の下に潜むジェンダーの問題に着目し、「私」を束縛している男性ジェンダー規範を炙り出す。最終的には遠藤文学で重要な位置を占める〈弱者〉と〈強者〉をめぐる問題にジェンダー的視点を入れることで、従来個人の内部の問題に収束されがちな〈弱者〉の苦しみ、個人と集団ひいては共同体の関係性において新たに考察し、より立体的な人物像を提示することが目的である。

一、「私」の原型

「私」は、少年時代に親の影響で無自覚なまま洗礼を受ける。その後、キリスト教系大学の男子寮に入るも、身に合わない信仰が心の葛藤の種となり、大学卒業を機に、ついに教会から足が遠のいてしまう。そして小説家となり、豊かな生活を手に入れたが、内心ではけつして満たされることがなかった。ある日、ローマでの旅の途中、突然計画を変更し、一人でエルサレムを訪れ、イスラエル大学で九年ほど聖書学の研究をしてきた旧友の戸田と再会する。それをきっかけに、忘れ去られていた大学時代の思い出が次々と記憶の底から蘇ってくる。

「私」の深層意識に潜む一つの出来事は、「酔いで痺れた頭に、忘れていた思い出が、もう一つ戻ってくる。嫌だったあの日」(I エルサレム 〈巡礼 一〉、一九頁)という言葉から語られていく。それは私が入っていたカトリック男子寮の行事で、御殿場にある「癪」病院(原文のまま、以下同)に慰問に行く際のことである。「戸田が忘れていたことをまだ鮮やかにこちらが記憶しているのは、あの一日が私には自分の原型をむきだしにしたような日だという感じがするからだろうか。(中略)その日曜日が私がやがて教会に行くことなどやめる小さな種になったのかもしれない」(二二頁、傍線・中略引用者、以下同)とあるように、この出来事は自分の「原型」とされ、ほかの記憶を語る際に何度も遡られ、座標軸の原点のように参照される。以下、「私」の「原型」とは何か、この「原型」なる自己像はいかに形成されていたのかを考察してみる。

そもそも「私」は慰問や慈善に対して懐疑的であったし、「癪」病院に行くことも義務ではないと考えていた。ましてや、中学時代、一

時、「癪」にたいしノイローゼ気味になった経験もある。「そのくせ戸田のような連中から自堕落で信者らしくないと言われるのも嫌で、結局、参加してしまっただのである」。ここから、自らの信仰に疑問を持ちつつも「クリスチャンとはこうあるべきだ」という信徒らしさを規定する教会の規範が、「私」の内面を束縛していることが垣間見える。

では教会の規範とは何か。「私」が子供の頃に習っていたという『公教要理』(カトリックの信者になるための教理入門書の記述が手がかりになるであろう。『公教要理』第二部では「キリスト教的徳」、「罪」、「天主の十誡」といった章が設けており、カトリック教会の戒律について詳しく説いている。とりわけ「キリスト教的徳」という章に注目してみれば、「救霊を全うするには、たゞ天主の御教を信ずるのみでは足りない。尚、罪を避け、徳を修め、掟を守らなければならない」という言葉から始まり、天主と他人と我が身とに対する義務を完全に遂行する「超自然的倫理徳」(「賢明・正義・勇氣・節制」など)、並びに「信徳」・「望徳」・「愛徳」からなる「対神徳」が掲げられている。⁴⁾

本作において「癪」病患者への訪問行事は、まさに教会が「愛徳」の実践を信者の学生に求めている一例であろう。上記の『公教要理』では、「愛徳とは限りなき善に在す天主を萬事に超えて愛し、又天主のために他人をも己の如く愛する超自然徳」とあり、「肉体的慈善業」として「病者を見舞ひ、孤児・老人を保護し、貧者に施與をなすこと」が挙げられている。⁵⁾

「私」はこうした教会の期待に応えるために患者訪問に参加しつつ

も、「自分の気の弱さと張りきった連中のどこか偽善的な会話に嫌悪を感じ」る。そして「足に小さな怪我をしていたし、その怪我に病菌がうつるのを心配していた」(当時の誤った偏見、論者注)ため、みなが合唱している間も「どうしてもこみあげてくる怯えや、そんな怯えを感じる自分への自己嫌悪と闘っていた」(二〇頁)。さらに、親睦のための野球の試合中、患者との接触をためらってしまう出来事が起きる。その結果、相手を傷つけることになってしまったのである。⁽⁶⁾

以上のことを鑑みれば、「私」の「原型」とは、「愛徳の実践」など教会が信者に求める行為で躓き、信徒らしく振る舞うことができない、もしくはクリスチャンとしての役割を果たせない自分の「弱い」姿として理解できる。

この「私」と対照的に描かれているのは、男子学生寮の舎監、ノサック神父と、その指導のもとで自ら進んで入信した学友の戸田である。ノサック神父は、法律違反で逮捕される危険を冒してまで学生に尽くすような信者である。例えば、防空演習中に咯血した寮生室戸を救助するために、警防団の警告に反して電気をつけるように指示したり、肺病で入院していた室戸を毎日のように訪ね、当時日本人の手にできない特別配給のバターを与えたり、闇市でやっと手に入れた牛乳を持っていったりする。それらの行為を通して、イエスの献身的な〈愛〉を完璧に体現しており、信者の鑑といえる存在であった。そのノサック神父に師事し、早朝のミサなど教会の規範を全うしている戸田は、神父になるように奨められるほどの模範生として周囲の学生から眼差される。

上記の患者訪問において、「私」は戸田から「自堕落」という叱責

を受けることを極度に恐れていた。そのためしづぶ「癪」病患者の慰問行事に参加したが、内心では恐怖や自己嫌悪と闘っていた。それに反して戸田は、消毒風呂に入ることすら患者に対する「侮辱」だとし、「すべきではない」と拒否した。加えて、学生たちの列から前に出て患者たちのために詩の朗読をし、患者たちと野球をする提案までする。

むろん戸田は、患者に対する善意と奉仕、自己犠牲の心、また確固たる信仰と意志に満ちており、一クリスト教徒として極めて「正しい」行動を取っていた。しかし、そうはできない学生仲間の内面を配慮せず、結果的に他人に自らと同じ行動を強要してしまっていた。現に前述したような「私」の内面の苦しみは、戸田には全く見えていない。

戸田の「自信に充ちた顔」を眺める「私」の感情には、彼の独善的な態度への対抗心や恨みが入り混じっていただろう。しかし心の深層には、戸田のごとく「強き」信徒になれないことへのコンプレックスが潜んでいると思われる。「私」はその劣等感があるため、戸田の「正しい」言動に従わざるをえなかったが、結局患者に対する恐怖が「演技」で覆い隠していた感情を顕わにし、他者を傷つけてしまう。それゆえの罪責感や負い目、自分に対する失望が心の奥に消えないトラウマとして残る。

以上見てきたように、「私」の回想には、少年時代に親の影響で洗礼を受け、信徒としてのアイデンティティが希薄なまま教会に足を運んでいた自分が、信者としての役割を求められていくことによって生じる葛藤が振り返られている。「私」はクリスチャンであるために教会の規範にそって信者のパフォーマンスをしようとするが、挫折と後

悔を繰り返すなかで、かえって「信徒らしくない」¹¹「弱い」自分を意識し続け、そのような自己像を自らの「原型」と見なししていくのである。

次章では、「私」を取りまく歴史的コンテキストに眼を向け、宗教と国家による二重抑圧という視点から、「私」の「原型」の形成に関わる社会的背景について考察してみる。

二、宗教と国家による二重抑圧

作中に「私」と戸田がともに住んでいた、「基督教のJ会が経営している大学」の、「四谷」の寮に関する記述がある。これは上智大学の構内にある、聖堂クルトル・ハイムと隣接してあった信者の学生寮の「聖アロイジオ塾」がモデルになっていると推測される。⁷

ケイト・ワイルドマン・ナカイ氏(NAKAI Kate Wildman)によれば、一九一三年にイエズス会によって創設された上智大学は、学内での宗教活動や布教を制限する当時の政府方針の規制を当初から受けており、自らの活動をその制約内に限られていた。しかし、その反動から一九三二年には、カトリック信徒の学生数名が靖国神社での敬礼を行わないという事件がおき、大学の存続が危ぶまれる事態を招くことになった。これをきっかけに、カトリック教会は神社参拝を宗教的行為ではなく、忠誠や愛国心の表現であるという政府の見解を公式に受け入れ、これまで「宗教的」とみられた国家儀礼を「正当な権威に対して払うべき敬意」と見なし、その結果カトリック信仰と両立しうるものとして認めるようになった。それに加えて、上智のイエズス会士た

ちは日本文化や「日本精神」の表現といった問題に、肯定的な態度で取り組むようになった。

本作において、「私」はまさに「靖国神社事件」が起こった翌年に入学しているという設定である。¹⁰ 次の引用では、毎月行われる大詔奉戴日の儀礼、即ち学生たちが「校庭に集まって勅諭の朗読を聞き、国旗の掲揚に注目させられる習わし」が描写される。北支戦線から帰還し、配属将校として新たに大学に送られてきたという中佐の威圧的な姿勢を通して、国家による大学の、とりわけ宗教に対する管制が表徴されている。

「敬礼。別れ」

そういう号令がかかった時、突然、中佐が動きだした教員たちを制し壇上に上った。ながい間、彼は学生たちを鋭い眼つきで見おろしていた。いかにも自分の圧力をためそうという小児的な姿は私には滑稽に思えたが、笑い声をたてることはできなかった。

「お、お前たちは……」中佐は興奮すると、どもる癖があった。「腐っておる。お前たちだけでなく……この大学の、がい……外人も、職員も、腐っておる」

(Ⅲ ユダヤ人虐殺記念館 〈巡礼 一二〉、四六頁)

ナカイ氏は、靖国神社事件後、上智のイエズス会士の雰囲気は、「暗く、落ち込んだものとなった」と述べている。¹¹ 「私」の記憶のなかでも、「あの頃、警察にたえず監視されていた彼等は、足音をしのばせるように暗い顔で校庭や校舎を静かに歩いていたものだ」(Ⅰ、一一

頁)。そのような雰囲気の中にいる信者の学生たちも、「日本が戦争をしているのに敵性国民の宗教を信じている」と嫌味を言われたり皮肉られたりするだけでなく、刑事から思想調査も受けていたという。

このように、戦中の「日本精神」という国家イデオロギーの支配下にあつて、キリスト教信者であること自体が危ういことであり、信徒たちはクリスチャンとしてのアイデンティティの揺らぎを日々体験し、自らの無力さを噛みしめていたであろうことは想像にかたくない。「私」の「原型」、即ち「弱い」信徒としての自己像が形成していったのは、こうした社会状況においてであつた。次に述べる一連のエピソードがその形成に決定的な影響を与えたと思われる。

ある日、麹町署から来たという二人の私服刑事がノサック神父に命じて、寮生の部屋をあげさせ、蔵書を一冊一冊調べた。その後、学生たちを二人ずつ呼び出して質問を行った。戦場において敵を殺せるか、という刑事の質問に対して、戸田は不動の姿勢をとつたまま、はつきりと、「迷うと思うんです」と応える。そして「人間としても信者としても人を殺すことに悩むと思います」と、迫害の危険を恐れずに信徒である自らの立場を表明し、試練に耐え忍んで信仰を守り抜いた。戸田の勇ましい振る舞いと対照的な形で「私」の対応は次のように語られる。

「信者かね」

「信者というほどの……」

私はかすれた声を出した。

「信者じゃありませんけれど……」

「あんたはだね、靖国神社と教会とのどっちを大事にしますか」

(中略)「ぼくはどちらも大事にします」

「と、あんたはやがて戦場に出るだろうがね……同じ宗教を信じている敵を殺せるかい」

「殺せます、もちろん」

癲病院でベースとベースの間にはさまれたあの時と同じような、歪んだ顔をして私は答えた。そしてこの卑怯な自分を、嫌な奴だと思つた。(V 死海のほとり 〈巡礼 三〉、七四頁)

「私」は信者であるために嫌な目に会う時には逃げようとしたし、「洗礼を受けていることを外でも勤労奉仕の工場でもひたかくしにかくしていた」。ここでも、キリスト者の身分を伏せてしまう。しかし「この卑怯な自分を、嫌な奴だと思」つたのは、かつて「癲」病院で病菌への恐れから「愛の掟」(注5)を破ってしまったのと同じように、国家の圧力に屈し、「汝、殺すなかれ」という掟に背く発言をしたからであろう。

クリスチャンとしての「私」の妥協ないし背信の行為の頂点として、舎監ノサック神父への裏切り行為が語られる。寮生たちに尽くしてきたノサック神父の思いやりを「私」はふみにじることになる。ある日「私」は、刑事の威圧的な脅しに圧倒され、舎監室の鍵を刑事に渡しただけでなく、ノサック神父の言動の違法性や「利敵性」に領き、結果的に神父を告発してしまったのである。¹³⁾

「私はこの思い出を一度も自分の小説に織りこんだことはない。が、ノサック神父を裏切った——裏切ったというのが大袈裟ならば——見

棄てたあの十分間のことは、うす汚い人生の塵が覆った長い歳月の間にも時々、心に甦ることがある」(Ⅷ カナの町にて、一〇八頁)とあるように、この苦い思い出は、「癩」病患者訪問の出来事と同じように、「私」の深層意識に押し込まれ、蘇るたびに〈痛み〉を引き起こすようなトラウマとして残ってしまう。そして「卑怯でらしなかった私はやがて自分の弱さに苦い諦めを持ち、次第に教会から遠のいた」という独白からは、「私」の「原型」の確立が読み取れる。

ここまでの分析からわかるように、「私」の原型の形成の背後には、信者のパフォーマンスをめぐる挫折と葛藤に加え、戦時下の上智大学における国家公権力と宗教の衝突(ヘゲモニー闘争)という事情、それによる二重抑圧という社会的背景が深く関与しているのである。

三、〈強者〉／〈弱者〉と男性ジェンダー規範

ところで、〈強者〉と〈弱者〉をめぐるテーマは遠藤文学の大きな柱の一つである。作中の「私」というキャラクターは、〈弱者〉として造型されているだろう。遠藤文学の世界において、『沈黙』(新潮社、一九六六・六)のキチジローに代表される〈弱者〉は様々な形で登場し、圧倒的な存在感をもって描出されている。〈弱者〉とは、教会の理想、理念への忠誠に欠け、危険や困難に遭うと教会の教えを棄ててしまう「裏切者」「背教者」のことである。その対極的な存在である〈強者〉とは、教会の教えを頑なに守り、キリストの栄光を証するような模範的な信者のことである。ただし、この〈強者〉／〈弱者〉の区分は、基本的には権力関係を表しているのではなく、信仰心の強さ／弱さな

らびにその「表出」となる実践行為の優劣を問題にしている。

この〈弱者〉の系譜に、本作の「私」も入っているだろう。実際、イスラエルの旅中の心理からも、「私」が自ら〈弱者〉であると認めていることが裏付けられる。プロテスタントの牧師である「熊本氏」の、「信仰とはね、あんた、素直に謙虚に神の言葉を受け入れることですよ」という助言に対し、「私」は「そうだと思います」と首肯しつつも、内心では次のような思いを吐露している。

だが人間には素直に信じられる種族と、ねじくれた心をもてできぬ種族との二種があるのだと、いつの間にか私は考えるようになっていた。癩院でベースとベースの間にはさまり患者の前で立ちどまってしまった私。ノサック神父の思いやりを刑事の脅しでふみにじった私、その私には愛などという言葉よりエゴイズムという言葉のほうが、修道女の敬虔ぶった顔より代々木の温泉マークで私と寝た女の顔のほうが、はるかに信じられるのだ。

(Ⅸ ガラリア湖 〈巡礼 五〉、一三九頁)

表現こそ違いが、右記の引用で「素直に信じられる種族」と「ねじくれた心をもてできぬ種族」という二種の人間は、まさしく「神の言葉」を土台とする教会の教えや規範に従順な〈強者〉と、その対立面である〈弱者〉を指しているように思われる。「私」は過去に信者のパフォーマンスで挫折と失敗を繰り返してきたために、「愛」や「敬虔な信仰」が存在する〈強者〉の世界とは一線を画す、「エゴイズム」や罪といった〈弱者〉の世界に自己同一化してしまっている様子

が見てとれる。

一方で問題となるのは、「私」が〈強者〉と〈弱者〉の二分化を「種族」や「心」といった本質主義的な概念で捉えているということである。「強さ」／「弱さ」をめぐる規範は、文化や社会によって構築されたものとして相対化すべきだと考える。

これまでの分析からもわかるように、〈愛の行為〉をはじめ、本来は自主的・主体的になされるべき信仰の実践が、教会という共同体の中で絶対的な規範、ひいてはイデオロギーとして制度化されてしまった。教会側が強要する「義務」を行う信徒のほうも、いかに立派な信仰行為を実践できたかという基準で互いの信仰の強弱ないし信者の優劣を判断する。こうして「信者らしい」＝「強い」／「信者らしくない」＝「弱い」という境界線が生まれ、信仰共同体における抑圧と排除のメカニズムが働くようになっていたのである。こうした背景のなかで、「私」は宗教イデオロギー¹⁵による抑圧を受けていたといえる。加えて、この「強さ」／「弱さ」をめぐるキリスト教信者の規範と、文化的・社会的性差、ジェンダーとは無関係ではない。以下、宗教と国家のイデオロギーに男性ジェンダー規制が浸透しているということを論証していく。

まず、「私」がエルサレムについた日の午後、ホテルの部屋で見た夢から分析しよう。

（よ）これた壁に蚊を叩き殺した染みが幾つもついて、壁と壁とにわたした綱の洗濯物からすえた臭いが漂ってくる。（中略）基督教系のこの学校で教えていた神父や修道士たちの暗い禁欲的な顔が腋

臭の臭いと一緒にかび、最後に、戸田に似てしかし戸田ではない丸い眼鏡をかけた学生もあらわれた。丸い眼鏡の学生は、私の蔵書を一冊一冊、調べるようにとり出しながら、窺うような眼つきで、「この大学の神父たち、同盟国の外人と言っているが、蔭で何をしているか、わからないよ。スパイ行為もやっているかもしれない」そして気の弱さから私は、その言葉にうなずいてみせる）

（Ⅰ、一〇頁）

前章で見た、刑事が信者学生の蔵書を調べる事件と、「私」が舎監室の鍵を刑事に渡し、ノック神父の説教を「利敵行為」と認めてしまった出来事を想起させるシーンである。一方で、「戸田に似てしかし戸田ではない丸い眼鏡をかけた学生」という存在が注意される。事実のレベルでは刑事がなした役割を、夢の中では、戸田と似たような要素を持っている学生なる人物が果たしているという点は興味深い。¹⁶

現実世界では戸田と刑事は、教会と国家公権力の代弁者という、一見対極にある存在のようにみえる。しかし、「私」の内面において両者は、〈弱者〉・「裏切者」としての「私」の生き方を剔抉する〈強者〉・「忠誠者」という意味で、「私」の信者として、あるいは日本国民としての在り様を問い詰め、弾劾する威圧的な存在という形で重なっている。そして夢において「私」が「気の弱さから」「その言葉にうなずいてみせる」という仕草から、戸田は刑事と同様、その言葉や意志に対する服従を要求するような権威や支配力を持った存在であることがわかる。

オーストラリアの社会学者レイウイン・コンネル氏(Kaewyn Connell)は男性性の複数性と階層性に基づくジェンダーの社会理論を展開し、そのなかで最も霸権的な位置を占める男性の在り方を「ヘゲモニックな男性性」というキーワードで捉えている。¹⁷「私」にとつて戸田や刑事は、まさしく「ヘゲモニックな男性性」を具現化したような存在となっている。教会イデオロギーは国家イデオロギーと同じような力構造、即ち男性ジェンダー規制を通して「私」を支配しているのである。

作品の時代に即していえば、夢のなかの刑事は軍国主義のイデオロギーによつて生産される「軍人的男性らしさ」¹⁸の象徴である。「私」の回想において、配属将校の中佐から暴力を振る舞われた屈辱的な体験がリアルに再現されている。そこでは「軍人的男性性」の権化ともいべき中佐の圧倒的な力にただ屈服せざるをえないことへの自嘲が、「私」の内面の抑圧と苦しみを際立たせている。¹⁹

一方で、戦時下の国家のイデオロギーの支配的な力に対抗し、信徒のアイデンティティの不安定さを払拭するために、教会では信仰を守り抜くことが信者らしき行動として賞賛される風潮が生まれ、そして宗教イデオロギーが力を持ち始めていったのである。そもそも「私」と戸田が住んでいる「男子学生寮」という空間自体、イエズス会が道徳的・政治的制約条件の厳しい日本の環境でカトリックの世界観を伝えるという目的からとつた戦略の一つとなっている。²⁰

こうした背景において戸田はいわば、教会イデオロギーによつて称揚される「信者の男性らしさ」を具象化した存在といえる。その「男性性」は、怠惰や疲労を克服し、苦難や試練を耐え忍び、「自己犠牲」

を成し遂げる英雄的な力の形で顕現される。早朝のミサや、「癩」病患者訪問への積極的な態度、また公権力に卑屈せずに信仰を守る勇ましさと毅然たる態度など、確固とした信念に基づいた行為がその証拠である。

戸田の姿にイエズス会士である神父たちが男性モデルとなっていることはいうまでもない。ピーター・C・ハルトマン氏(Peter C. Hartman)によれば、「貞潔」と「服従」の精神を強調し、強い意志と厳しい規律をもつてカトリックの信仰を宣べ伝えるイエズス会の精神風貌と管理方式は、軍隊のそれに相通じることである。

さらにいえば、この戸田は当然イエス・キリストの男性性を規範にしている。西洋の布教活動のシンボルとして、イエスは「威厳と栄光に満ちた王」、「力強く雄々しい英雄」として偶像化されてきた。²¹西洋人のエゴイズムに根ざしたヒロイズムや権力志向の男性的基準のもと、こうした男性ジェンダー化されたイエスのイメージが女性抑圧や女性蔑視に向かう家父長制社会の支配メカニズムを支えてきたことは、フェミニスト神学者によつてすでに議論されている。²²一方でこの規範が、実は男性にも同じく抑圧を与えていることは無視できない。本作における「私」も戸田も実は、ノサック神父をはじめとする西洋人の神父たちによつて刷り込まれた「力あるイエス」のイメージによつて束縛されている。²³宗教の領域にジェンダーが入り込む構図は男性ジェンダー化されたイエスのイメージに顕著に現れている。

伊藤公雄氏は、近代の男女の二項図式のなかで、男たちは自分の男性性という構図に縛られて、優越と所有と権力のゲームに常に追い立てられていることを指摘している。また一方でこのゲームで勝者にな

することはきわめて困難であるため、男たちは、完全に達成することができない男性性という不全感と不安定感を背負いこむと述べ、さらに個人では達成不能な不安定な男性性を、社会全体を「男性化」することで克服しようという運動としてファシズムを位置づけている。

本作の「私」もまさしく、国家と宗教のイデオロギー装置によって作られた男性性のコードによって縛られている。しかも、「男子学生寮」というホモソーシャルな集団に置かれ、生理的・心理的な「弱さ」が現す不安定な男性性で悩み、抑圧されてきた。その抑圧は戸田との関係性を通して表象されている。

前述の通り、戸田は自らの意志で洗礼を受けた男であり、信仰をはじめ、生きる指針や思想など人生のすべてにおいて主体性をもって自己をコントロールしている。そして自らの学識と精神の向上のために絶えず努力をし、そのことに対して自信と優越感を持っている。そのような戸田に「私」が抱くコンプレックスは無論、彼の信者としての「強さ」に由来するものと意識されるが、しかし「私」の羨望の眼差しはしばしば戸田の「男性らしさ」に向けられている。例えば、「皮肉っぽい笑い」や「教師風の声」、そして「いつも人を見くだしたような調子で相手を言いまか」すような「押しつけがましい言い方」や、「甲でなければ乙。乙でなければ甲」、「この宗教が嫌なら棄てる。棄てないのなら自信をもって自分のものにする」というようにはつきりと断定する論理も、結局のところ戸田の男性性の誇示と言えよう。

そのような戸田の姿が、二〇数年が経った今でもありありと思ひ浮かぶのは、それほど戸田の男性性が「私」の心に深く刻み込まれているということである。そして、戸田のようにならない自分の痛々しい

挫折の体験と深く関わっているからである。

以上の分析を通して、これまで宗教の領域で本質主義的に捉えられがちな、〈強者〉／〈弱者〉という二項対立に、行為遂行的に構築されるジェンダーのコードが入り混じり、イデオロギーとして機能する男性ジェンダー規範による抑圧を生じさせていることが明らかになった。つまり、「私」の〈弱者〉たる「原型」は行為の反復によって、パフォーマティブに構築されたものである。自分の〈弱者〉ぶりを辿っていく「私」の回想は、そのまま「私」が既成の教会が求める信徒の役割及び男性の役割に違和感を感じる軌跡に重なっていくのである。「私」の語りによって、教会のイデオロギーに基づく「強さ」／「弱さ」の境界線と、ジェンダー規範との交錯がもたらす男性信者の苦悩が浮かび上がっている。

おわりに

本稿では、従来宗教的側面から論じられることの多かった〈弱者〉という概念を総合的に捉え直し、その根底には、ジェンダー的要素が少なからず潜んでいることを検証した。

上記のように、宗教・国家・ジェンダーによる多重的な抑圧を受けてきた「私」は、終戦そして卒業を経て、教会から離れてしまう。しかし二〇数年間を経て、それらの抑圧を振り払えずにいる。特に男性性による抑圧が大きな要素となっていたのである。それは、イスラエル巡礼の旅の目的をめぐる次の内省から垣間見える。

自分の意志でなく親から一つの宗教を選ばされたということは後に私の心に重荷となり、幾度も棄てようとしたものだ。そのくせ棄てたあと、自分がどうなるのか、何をするのか自信もなく、心の奥でこの矛盾に決着をつけねばならぬと何時もきかせてきたのである。ローマで急にエルサレムに行こうという気になったのは、あるいはこの決着を今度はつけてみようという心が働いていたのかもしれない。(I、一三頁)

ここに端的に表れているのは、受け身的な信仰ではなく、自ら選び、信じるか・棄てるかという選択を遂行する主導権・主体性への「私」の執着心である。それは、学生時代に戸田から「自堕落」と言われ、「戸田のように物事をはっきり選び、選んだことに確信をもてる男を羨んでいた」心理と重なっている。そして「イスラエル巡礼」をきっかけに男らしく決着をつけようという決意が見られる。「私」がかくも男性役割に囚われ、行為によって男性性を主張しつづけなければならぬという苦しさが暗示されている。

しかし一方で、「私」の信仰に対する棄てきれぬ思いも同時に見られる。実際、イスラエル巡礼中に、「私」はイエスだけでなく、「ねずみ」というあだ名の修道士の足跡をも追うようになり、当初の思惑とは異なる境地に到達することになる。つまり「私」は、依然として男性性に強く拘泥するとともに、男性性の鎧から脱却したいという希求も無意識下に持っていたのである。結局、「私」が確認できた「ねずみ」の最期の姿も、旅を通して出会った「本当のイエス」も、「私」と同様に宗教的・ジェンダー的規範の軛を負って苦しむ「同伴者」で

あり、そのような認識の変化を遂げることによって、「私」は男性性からの解放とともに自分の救いの可能性を見出していく。こうした視点からの解釈は〈群像の一人〉で描かれているイエス像、ひいては遠藤のキリスト教理解とも緊密に関わっている。その詳細については別稿に譲りたい。

注

(1) たとえば、吉村善夫「キリスト教と文学——遠藤周作氏の非神話的小説——『死海のほとり』『兄弟』一九七三・一二。

(2) 川嶋至『死海のほとり』の側面「早稲田文学」〔第七次〕五(一〇)、一九七三・一〇。

(3) 松原新一『死海のほとり』への疑問「風景」一九七四・二。

(4) 日本天主教教団編、中央出版社、一九四二年四月版による。

(5) 注(4)に同じ、八八頁。聖書においても、「神を愛すること」「自分を愛するように隣人を愛する」という「愛の掟」は、旧約時代の律法(トーラー)における最大の訓戒とされてきた。加えて「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」(『新約聖書・ヨハネによる福音書』一五章一三節、日本聖書協会共同訳、二〇一八)というイエスの言葉を基に、教会は他者のための〈献身〉や〈自己犠牲〉を〈愛〉と〈倫理〉の理想としてきた。

(6) このエピソードは、短篇「イヤな奴」と「雑木林の病棟」、そしてエッセイ「ハンセン氏病院」でも繰り返し描かれている。遠藤は実際に慶應義塾大学予科生の一九四三年四月から二年間、信濃町のカトリッ

ク学生寮白鳩寮で生活し、寮の行事で御殿場にあるカトリック系ハンセン病病院の神山復生病院に慰問に行っている。山根道公「解題・『イヤな奴』全集第六巻『短篇小説Ⅰ』（新潮社、一九九九・一〇）、三七〇頁を参照。

(7) 山根道公氏によれば、遠藤が上智予科にいた期間の一九四一年四月から翌年二月まで、この寮に入っていたことが、遠藤の寮友の証言から確認できた。『遠藤周作 その人生と『沈黙』の真実』（朝文社、二〇〇五・三）、五三―五四頁参照。

(8) 「戦時下の上智大学——カトリック系大学はいかに「日本精神」と取り組んだか——」『戦時日本の大学と宗教』（江島尚俊・三浦周・松野智章編、法蔵館、二〇一七・三）、八三―一三〇頁。

(9) 靖国神社事件については『上智大学史資料集』第三集（上智大学史資料集編纂委員会編、一九八五・三）、七三―一〇三頁も参照。

(10) 一方で、実際の作中時間は四〇年代初頭と推測される。遠藤は史実通りに書いているのではなく、虚構的に時間を再構成している。この事件が織り込まれていることから、宗教と国家の衝突を前景化したいという意図が窺える。

(11) 注(8)に同じ、一〇三頁。

(12) 「十誠」のなかの第五誠である。『旧約聖書・申命記』五章一七節。『公教要理』注(4)に同じ、一一五―一二七頁も参照。

(13) 『ましてそんな役に立たん学生のため、外人の神父さんが日本の法律を犯すのはどういふことかね』黙っている私に若い刑事のほうが、どう思っているんだとたたみこんだ。『いけないと思います……』（中略）私は、おどおどして答えた。『反対でした』『外人でも日本にいる以上、

利敵行為の言動は許されんのだ』（Ⅶ カナの町にて 〈巡礼 四〉、一〇七頁）。

(14) 遠藤は三好行雄氏との対談で、〈強者〉ではなく、「弱者もしくは劣等者の立場から書く」姿勢を提示し、「それは、私がキリスト教に持っている考え方と一致している」と述べている。「文学——弱者の論理——遠藤周作氏に聞く」（『国文学 解釈と教材の研究』一九七三・二。長濱拓磨「遠藤周作——〈弱者〉の形象——」『研究論叢』八八、二〇一七・一も参照。

(15) このような現象が起きる原因の一つに「律法主義」が挙げられる。「律法主義」は旧約時代から律法重視のユダヤ教に根深く存在している。

のちのキリスト教でもそれが受け継がれ、とりわけ遠藤が青春期を過ごしたカトリック教会では信徒に対して戒律を守ることが厳しく要求されている。そのことは『公教要理』からも見てとれる。そして遠藤自身は、このような教会のイデオロギーを「父性原理」という概念で捉え、批判している。井上洋治「解説」『死海のほとり』（新潮文庫、一九八三・六）、四一七―四二四頁参照。

(16) フロイトのいう「夢」の「圧縮」作業として理解できる。『精神分析事典』（岩崎学術出版社、二〇〇二・三）、四七二―四七三頁参照。

(17) *Masculinities*, Polity Press, 1995. 「ヘゲモニックな男性性」に関しては多賀太氏が簡要に解説している。「日本における男性学の成立と展開」『現代思想』二〇一九・二、二六―二七頁。

(18) 大日方純夫「二（総論）つくられた男の軌跡」『男性史2 モダニズムから総力戦へ』（阿部恒久・大日方純夫・天野正子編、日本経済評論社、二〇〇六・一二）所収。「4『忠勇義烈』の『勇士』たち——軍神と軍

国美談の世界」、一七―二二頁参照。

- (19)「中佐は長い間、私を睨みつけていたが、学部と姓名を訊ねて、急に軍人に賜わりたる勅諭を言ってみよと命じた。私は口ごもった。この勅諭を暗誦するように、平生、教練の時間に命じられているのを怠けていたのである。照れくさを誤魔化すために、こういう時よくやる卑屈な笑いを浮べて私は頭をかいた。『不謹慎!』突然、頬を拳で烈しく撲たれた。腕で顔を覆うと、腕にも衝撃をうけた。」(Ⅲ、四六―四七頁)。

- (20) ナカイ氏によれば、イエズス会は近隣にあるが大学組織の一部に完全に組み込まれてはいないという点を利用し、大学におけるカトリック活動の中心的な場としたことである。なお、海外のイエズス会誌に送られたある報告は、一九二〇年一〇月の項で、上智初代学長のヘルマン・ホフマン(Hermann Hofmann)が「毎週水曜の午後、非キリスト教徒の学生の希望者に、日本語での宗教の指導をしており、毎週三回、夜に大学寮に住む寮生に対しても、同様の指導を行っている」ことを紹介している。注(8)に同じ、九一頁。

- (21) *DIE JESUITEN*, C. H. Beck, 2001. 日本語訳はないが、中国語訳『耶穌会簡史』(谷裕訳、宗教文化出版社、二〇〇三・三)参照。

- (22)『沈黙』のロドリゴが最初に持っていたイエス像はまさにそれである。

- (23) 父権の象徴として構築され、男性ジェンダー化された力強いイエス像をめぐる議論は、フェミニスト神学の分野で様々になされてきた。とりわけ、家父長的システムは男性の「聖性」における優位性を強調し、男性的な神のイメージの構築によって女性抑圧を正当化してきたという問題が俎上に上がっている。Elizabeth Johnson, *She Who is-*

The Mystery of God in Feminist Theological Discourse, Crossroad, 1993. また Rosemary Radford Ruether, *Introducing Redemption in Christian Feminism*, The Pilgrim Press, 1998.

- (24) 戸田が聖書学の研究によって解明した「事実のイエス」の姿で蹟き、信仰を棄ててしまったことも、彼が「男性ジェンダー化されたイエス」の陥穽に陥っていたことを露呈している。

- (25) 「俺は女ではない」「男」の枠外にいるものは男ではない＝ホモフォビアの構図である。「男性学・男性性研究＝Men & Masculinities Studies 個人的経験を通じて」「現代思想」二〇一九・二、一頁参照。

付記

本文引用は『遠藤周作文学全集』(全集と略す)第三巻『長篇小説Ⅲ』(新潮社、一九九・七)による。

(よ はんはん、広島大学大学院博士課程後期在学)